

サウスポの留学生も軌道

競歩では常にどちらかの足が地面に着いていなければならず、守らなければロス・オブ・コンタクト」という違反になる。また前に

日本の発展の始点になったのが03年のパリ世界選手権。出場した男子4人のうち3人が失格となった。

進歩を物語っていた。選手権観戦者ならどはの受け止めたが、自身初の五輪メダルにも満足感がないさまは、かえって日本の急速な

「メダルという形に残すことができうれしい」。東京五輪男子20キロ銀メダルを獲得した池田向希(旭化成)は日本勢過去最高の成績に喜色満面だった。一方で、銅メダルの山西利和(愛知製鋼)は「ふがいない、悔しい」。19年世界選手権観戦者ならどはの受け止めたが、自身初の五輪メ

長い雌伏の時を経て、日本が競歩大国の地位を築きまでになった経緯をたどる。陸上競技の花形といえる1000mやマラソンが華が近年、日本陸上界でも輝かしい成績を残しているのが競歩だ。2019年世界選手権は男子の2種目で優勝、21年東京五輪でも2個のメダルを獲得した。

スポーツの流儀

競歩大國誕生の軌跡①

失格続出から10年余で栄冠



2021年東京五輪の男子20キロ競歩で銀メダルを獲得し、銅メダルの山西(左)と笑顔で握手する池田

イタリア手本に方法論確立

科学に基づくトレーニングでも、イタリアは日本のはるか先を行っていた。血中乳酸値や心拍数をまめに計測し、トレーニングや体調管理に生かす。今村は現役生活の晩年、順天学院に入り科学的トレーニングを学んだが「あくまで研究所の中での測定」にすぎなかった。机上の研究をどう実践に生かすかが分かったことも収穫だった。

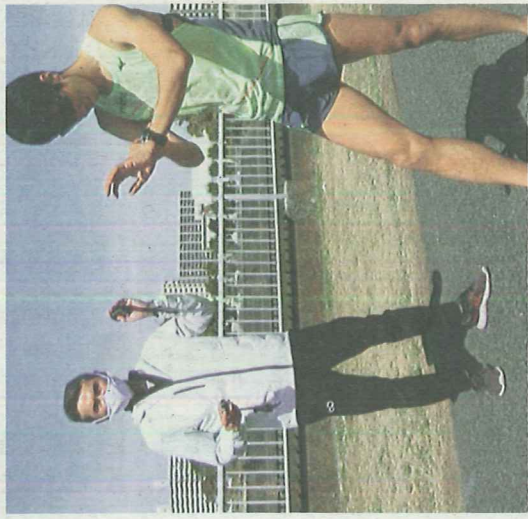
帰国後しばらくして日本集業団陸上競技連合の競歩強化責任者になった今村が、イタリア式の導入とともに取り組んだことに強化合宿の見直しがある。

社会人選手をあまり鍛えることを目的とした集業

策を取らなければ」翌04年、強国イタリアから国際審判員の中心的存在

ら国際審判員の中心的存在だったニコラ・マツシオ、国際陸連(現世界陸連)競歩委員長のマウリシオ・タミシオを招き、講習会を

出ている足が接地してから地面と垂直になるまでの間、その膝が伸びている必要があり、曲がること「イベント・ニー」の違反に。主要大会ではこれらの歩型違反による警告を3度受けたとペナルティゾーンでの一時待機を科され、レース復帰後に再び違反すると失格になる。



今村氏(左)は競歩強化トップとして日本競歩技術向上に努めてきた。本人提供

開いた。ここで築いたイタリアとのパイプを太くしない手はない。次は日本側がイタリアに行って学びたいと打診すると快諾を得た。元五輪代表の小坂忠広は後に日本の屋台骨となる鈴木

修(富士通)、谷井孝行(元自衛隊)らシニアの選手を連れてイタリア合宿を実施。多くの五輪メダリストを育てたサンドロ・タミシオの指導を受けた。05年には同じく元五輪代表で、現役を退いて間もない今村文男が1年間の長期研修へイタリアに飛んだ。現在、日本陸連シニア

イクターとして競歩の強化トップを務める今村もサンドロに師事。名将の教えで特に役立ったものが「ヒールキック」だという。直近の大会に加え、その先の五輪や世界選手権も見据えて「技術と体力のレベルを上げる」のが肝。ひたすら目の前の大会に突き進む「場当たり的」(今村)な対応に終始してきた日本とは目標設定の射程が違った。

時期に応じて目的を明確化する「期分け」の概念も今村の目に新鮮に映った。1年間を「準備期」「鍛錬期」「試合期」「回復期」に分け、それぞれで歩行距離やスピード、回数をコントロールする。「イタリアの選手は、前の週に何歩もいたかを聞かれてみんなが

厚みを帯びていった。暑熱対策のサポートをするなどし、着実に強化体制が厚みを帯びていった。歩型技術を世界基準に引き上げるべく、今村が現役時代に指導を受けた1980年モスクワ五輪男子50キロ銀メダリスト、スペイン人のシヨルゲイ・リヨパルトを技術アドバイザーに招いたりする努力が実を結んだのが2015年世界選手権同50キロ。谷井が五輪と世界選手権を通じて日本初の表彰台となる位に入った。

19年リオデジャネイロ五輪男子50キロでは荒井広宙(自衛隊、現富士通)が日本初の五輪メダルとなる銅を獲得し、19年世界選手権は20キロ山西、50キロ鈴木がそれぞれ優勝。「パリの悲劇」からわずか10年あまりで、日本は世界に名だたる競歩大國に成長した。

今村が現役時の日本勢はよくメキシコで高地トレーニングをしたが、期分けの概念はおろか「強化の方法論がなかった」。徒手空拳の無念を後進には抱かせまい、との思いが組織力向上の原動力になったはずだ。

「国際情勢を知らない」とは、07年から19年まで国際陸連の競歩委員を務め、最新の情報収集に努めてきた今村の美談。世界を知り、己を知るための不断の歩みが道をつくった。||敬称略(合六謙二)

今日も走ろう



鈴木毅

春爛漫(らんまん)、プロ野球も観客制限を設けずに開幕した。今年こそは野球観戦を楽しみ、新しいヒーローの誕生を目撃したい。

5年ほど前、同年代のサッカー選手、三浦知良さんの試合を見たいと突然思った。これまでは映像を見ただけでしゅ

スポーツ & 文化

ガイド

- エドガール 4月23日午後5時、24日午後2時、渋谷・オオチャードホール。アンドレア・パッティスティトーニの指揮でブッチェーニ作曲のオペラを上演。オペラケストラが舞台上で演奏し、その周囲で歌手が歌い、映像などによる演出もあるセミ・ステージ形式。23日のエドガール役は福井敬、フィデリアアがドガール役。24日の同じ役は樋口達哉と大山亜紀子。ドラマチックな歌による愛憎劇。4000〜1万円。二期会チケットセンター①03・3796・1831。
- ぼくたちの音を楽しむ〜いずみたくと中村八次の歌物語 23日午後5時、
- 軽井沢トレイルランニングレース 5月7、8日、長野県軽井沢町と群馬県安中市、長野原町を巡るコースで開催。7日の43キロは参加資格18歳以上、制限時間10時間30分、参加費9800円。19キロは参加資格が中学生以上、制限時間7時間、参加費7500円。8日の5キロは参加資格が中学生以上、参加費4500円。キッズレースは小学生が対象で参加費2000円。主催は軽井沢トレイルランニングレース実行委員会。
- 国立競技場EKIDEN&リレーフェスティバル 5月15日、東京都の国立競技場で開催。駅伝は参加資格18歳以

場に出ていこう

はいえ、見た勝負動

坂道を上ると、林檎の花が

両方の足が地面から離れる「ロス・オブ・コンタクト」と、接地した脚が地面と垂直になるまでの間に膝が曲がる「ベント・ニー」。この2つの歩型違反を犯さず、それでいていかに思い切りよく足を動かしてスト

「この歩き方は良くない。失格にすべきだ」。レベル3の審判員は定期的に会合を開き、研修用のビデオを見ながら正しい歩き方について議論する。ここで悪い事例として取り上げられた選手は、その後の大会で全ての審判員からとりわけ厳しい視線を向けられることになる。「だからビデオの素材にならない歩き方をしないといけない」と、日本陸連の競歩担当シニアディレクター、今村文男は冗談交じりに語る。

競歩の国際大会で判定に携わる世界陸上競技連盟の国際審判員。なかでも五輪と世界選手権を担当するのは最上級の「レベル3」の資格を持つ、ろむぎりの二十数人に限られる。彼らにとって大会での判定と同様に重要な仕事は、仲間内での情報共有だ。

スポーツの流儀

競歩大国誕生の軌跡 ②

たゆまぬ解析、「歩型美」の源



鈴木の歩型は「世界一美しい」との評価を得た(優勝した1人の2019年世界選手権男子50キロ) 山本博文撮影

歩は動作解析の観点から

トドを出す。繊細さと大股の両立はウオーカーにとって永遠の課題だ。今村によると、違反のないスムーズな足の踏み出しには、前側の足を比較的体に近い場所に接地することが大切。対照的に、後ろの足は体から遠い位置で地面から離すことで一定のストライドを保ち、スピードにつなげられる。体を中心にまた、後ろ足と前の足までの距離の比率は「6対4」が理想だという。

この「国際的なスタンダードで黄金の比率(今村)を実現するためには体どのように使つか。日本陸連強化委員会の競歩種目コーディネーターで、世界陸連認定コーチの資格を持つ三浦康は動作解析の観点から



三浦氏(左)らのたゆまぬ研究が日本勢の安定した歩型の下地になった(本人提供)

選手をサポートしてきた。2000年代に三浦が海外の有力選手のフォームを分析したところ、脇腹で入る部横の中殿筋から発揮される「股関節外転トルク」が高いという結果が得られた。当時、青森県スポーツ科学センターに勤めていた三浦が東北の高校生への指導で研究結果に基づくトレーニングを取り入れると

国体や全国高校総体で優勝を含め3位以内に入る選手が続出。これを機に、本格的に日本選手をサポートするようになった。かつては骨盤を回すことが重要視されたが、むしろ骨盤の旋回を止める動きこそ重要との知見をもたらしたのも三浦だった。「足を回して骨盤が回りきりになるのを止めることで、反対

五輪の戦術分析も支えに

取るジャレド・タレントが所属していたが、その日常を見て思ったのが「世界一の練習が世界一まっすぐなわけではない」ということ。「当時、日本で強かったのは08年北京五輪男子50キロで入賞した山崎勇登選手だが、彼と比べてタレント選手の練習量は圧倒的に少なかった」と柳沢。途中で練習をやめることもあったという。だが、ロンドン五輪が近づくと「どんどんエンジンがかかってくるのが分かった。練習の質も目標達成率も上がっていった。あるとき、力がありながら日本選手が五輪でメダル

取得ジャレド・タレントが所属していたが、その日常を見て思ったのが「世界一の練習が世界一まっすぐなわけではない」ということ。「当時、日本で強かったのは08年北京五輪男子50キロで入賞した山崎勇登選手だが、彼と比べてタレント選手の練習量は圧倒的に少なかった」と柳沢。途中で練習をやめることもあったという。だが、ロンドン五輪が近づくと「どんどんエンジンがかかってくるのが分かった。練習の質も目標達成率も上がっていった。あるとき、力がありながら日本選手が五輪でメダル

側の足が前に引っ張られる。そういうメカニズムになっている」。選手を連れて合宿を訪れたことのあるイタリアの選手を見て、そのことに気付いたという。「イタリアは1920年代には既に金メタリストを出している。イタリア競歩100年の積み上げから出たもの」と三浦。「世界一美しいフォーム」との評価を得た日本の第一人者、鈴木雄介(富士通)を筆頭とする、日本勢の安定した歩型の下地には三浦らの地道な研究があった。

今村も長期研修で学んだイタリア式を取り入れる一方で、同じく強豪国であるオーストラリアに学んだのが山梨学院大コーチの柳沢哲だ。2011年秋から1年間、現地チームのスタッフを担当した。12年ロンドン五輪男子50キロで金メダルを

世界での勝者方を伝えた際、興味深く質問してきたのが池田回希(旭化成)と山西利和(愛知製鋼)。その2人が21年東京五輪男子20キロで銀メダルと銅メダルを獲得したから、柳沢の感概はひとしおだった。「勝ち方に課題を持った選手がメダルを取ってくれた」日本勢の底上げのために「その時々の世界一の国から学んできた一番いいところが日本に集積している」と三浦は語る。たゆまぬ知見の蓄積が、日本の競歩大国への仲間入りにつながった。

「敬称略(合六謙二)

を取れない理由をタレントに聞くと「こんな答えが返ってきた。「1年間通していいパフォーマンスをしようと思っているところに問題がある」目からうろこが落ちる思いだった。「休んでいいだと思つた」と柳沢。「タレント選手は国際大会では強かった一方、国内の試合ではよく負けていた。ただ調整の時期だから負けても構わず、目標タイムで歩けば十分だ。目的意識が明確だった」。どの大会も目いっぱい歩く真面目な日本勢にはなれなかった。

休養の大切さを日本に持ち帰った柳沢は、戦術面でも日本勢をサポートした。18年に4度セミナーを実施し、直近の五輪と世界選手権の計10大会についてスペースの推移を説明。日本での大会は、初めから飛ばしてどこまでもスタミナがもつたというパターンが多いのに対し、五輪や世界選手権はラスト5キロでのペースアップが多く、「如実にレースの仕方が違った」。

今日も走ろうぜ



鈴木 毅

新年度がスタートした。小・中学校の不登校の生徒数、小・中・高校生の自殺者数が過去最多だといふ。新型コロナウイルス禍で一斉休校中に、友達や教師との関係性が薄れていき、学校行事もなくなり、登校する意味を感じられないのだろう。

ガイドガイド

スポーツ & 文化

■赤穂ウルトラマラソン 5月8日、兵庫県赤穂市海浜公園内の1周5.5キロの周回コースで開催。100キロは参加費1万円、50キロは同7000円、30キロは同6000円で、いずれも参加資格18歳以上。10キロは参加資格が中学生以上、参加費は4000円。すべて制限時間は日没まで。主催は赤穂ウルトラマラソン実行委員会。

■日本画トリアイアングル 画家たちの大阪・京都・東京 5月8日まで、六本木一丁目・泉屋博古館東京。新装開館を記念して、大阪・京都・東京で活躍した日本画家の作品を紹介。木島櫻谷の「柳桜図」、修復後初公開となる橋本雅邦の「深山猛虎図」など、新収蔵品を含む約50点を公開。地域に根ざした日本画の魅力とその多様性を紹介する。月曜休。一般1000円。ハローダイヤル050・5541・8600。

から得る学び



■奥四万十トレイルレース2022 in 松葉川 5月15日、高知県四万十町の松葉川温泉を発着点に開催。36キロは参加資格が中学生以上、制限時間9時間、参加費9000円。キッズの部(2.6キロ)は

■最後の印象派、二大巨匠 シダネルとマルタン展 6月26日まで、新宿・S O M P O 美術館。19世紀末から20世紀

「もう競歩はサポートしなくていい」。2000年

今でこそ多くの選手が暑さを苦にしないが、その域に達するまでには時間を要した。日本大学教授で日本陸上競技連盟科学委員長の杉田正明が陸上男のサポートを始めたのは1991年。伊東浩司、朝原宣治らの距離を含め様々な種目の選手の体力測定などをしていたが、競歩陣のレベルはなかなか上がらなかった。

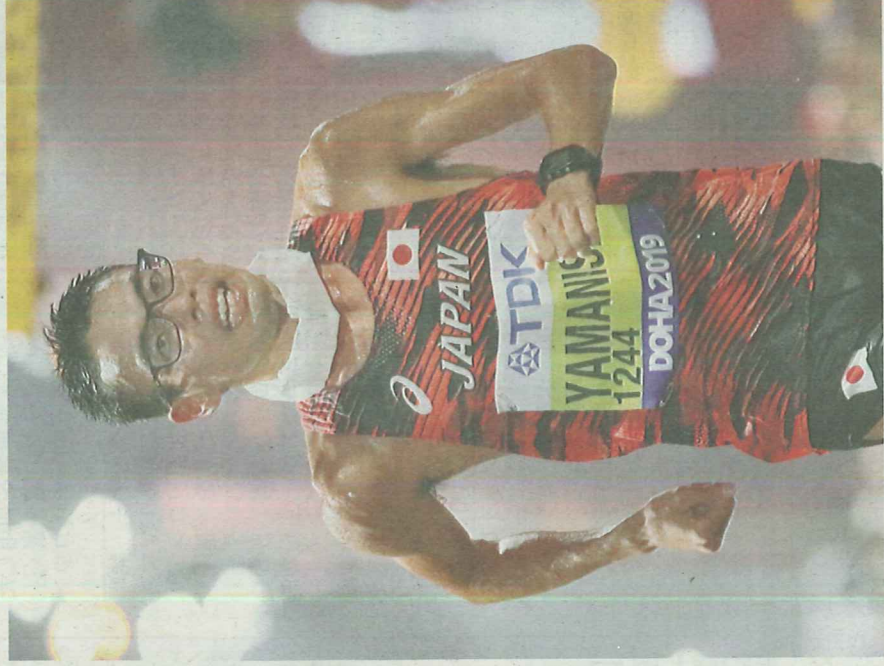
2019年にドーハで行われた世界選手権。競歩は炎天下を避けて夜中に行われたものの、蒸し暑さは和らぐず、途中棄権する選手が続出。その中で日本は男子20キロで山西利和(愛知製鋼)、同50キロで鈴木雄介(富士通)がそれぞれ優勝した。21年東京五輪では同20キロで池田向希(旭化成)が銀メダル、山西が銅メダル。暑さを制する日本勢の實力が証明された。

陸上競技で五輪と世界選手権が行われるのは夏から秋。長時間ロードを歩く競歩はトライアル選手との争いとともに、暑さとの闘いも大きなテーマだ。

スポーツの流儀

競歩天国 誕生の軌跡 ③

妥協なき先進の暑さ対策



2019年世界選手権男子20キロ競歩で優勝した山西。首に保冷剤を巻くなど万全の策で臨んだことが奏功した(山本博文撮影)

起床時の尿を分析し、脱水状態になっているかどうかをみることに加えて杉田が重視したが、選手が運動前に体を冷やすこと。水風呂につかるなどした後は乗に掛けるという。

選手に口酸っぱく有効性を説いた「アレーティング」を得意に守った二人が谷井孝行(元自衛隊)。合宿での練習前、ホテルのユニットバスに水をためておくことを日課とし、臨んだ15年の世界選手権男子50

合せて一段の暑さ対策が必要と陸上関係者の認識が一致した。当初、マラソン関係者からの要請で対策を講じるようになった杉田は、日本陸連競歩強化トップの今村文男に「競歩もやりましようか?」と打診。今村が「ぜひ」と応じ、14年から本格的な暑さ対策の取り組みがスタートした。

サポートが再開したきっかけは13年に夏季五輪の東京開催が決まったこと。16年リオデジャネイロ五輪と合わせて一段の暑さ対策が必要と陸上関係者の認識が一致した。当初、マラソン関係者からの要請で対策を講じるようになった杉田は、日本陸連競歩強化トップの今村文男に「競歩もやりましようか?」と打診。今村が「ぜひ」と応じ、14年から本格的な暑さ対策の取り組みがスタートした。



杉田氏らによる世界に先駆けた暑さ対策が日本競歩陣の躍進につながった

きで銅メダル。五輪と世界選手権を通じ、日本勢が初めて表彰台に立った。

アレーティングが重要な一方、そもそも体が暑さに慣れていないと高いパフォーマンスは出せない。「1日に60〜100分くらい暑い環境でトレーニングをして体温を1度以上上げる。これが世界的な教科書と杉田。日ごろから暑熱トレーニングをすると血漿は

冷却・順化・給水、万全の支援

現富士通)からは「あそこでもやっておいて良かったぞ」と感謝されたという。

「通常、体重が2%以上減少するとパフォーマンスに何らかの影響があるといわれる」と杉田は話す。発汗による減少幅をおおよそ2%以内に抑えるべく、練習中の体重減少率を細かく測定した。給水を取った選手がボトルを路上に放るたびに回収し、飲んだ量を把握。地道な測定を基に、取るべき水分量を選手ごとに提示した。

測定だけならどの国でもできるが、杉田はさらに踏み込んだ暑さ対策を取った。その一つが目前での結

「ほとほと汗が出る」(杉田)このトレーニングで血漿量を増やすなどすれば、暑い環境下ではもちろん、「大会当日が涼しくなってもプラスに働く」と杉田。ヒートルームで必死に汗をかき、同大会の女子20キロ競歩で銅メダルを獲得した岡田久美子(ビックカメラ、

つしよう)の量が増え、発汗量も増えて暑さへの耐性が高まるという。

この「暑熱順化」のサイクルを生むための設備も杉田はつくった。「仮想東京五輪」と位置付けた18年シヤカルタ・アジア大会を目前に控えたときのこと。合宿地の北海道千歳市に依頼し、市民アールの二室にストーブと加湿器を入れ、気温35度、湿度70%の「ヒートルーム」を整備。ここで選手に1時間、トレッドミルで歩くよう提案した。

水用ドリンクの開発。スポーツ庁の委託事業に応募し、ユニカ食品(東京・渋谷)とドリンクの粉末を共同開発した選手用の汗からどの成分が多く体外に出ていくかを分析。最良のカルシウムやマグネシウム、ビタミンDなど多くの栄養素を含む粉末を作った。

もう一つの策が、レース時に表面から選手の体を冷やすこと。杉田によると、体内の熱は手のひらと頬、足裏の3カ所から放出される。そこで、手のひらに巻き付ける冷却グッズを作った。所定の温度に冷やすことができる特殊な保冷剤で、冷感を求める選手の声に応じて首に巻きタイも用意。一部の選手は帽子の内側に水も入れた。

日本陸連の競歩担当シニアアレーターの今村は「深部体温が40度以上になるとパフォーマンスが低下する」と話し、五輪などでは自ら給水所でウォーターボットを移める。40度の危険ラインに達しないよう、こまめに替えの冷却グッズを選手に手渡し、ドリンクはレース局面や気温に応じて適切に温度管理したものを提供。水分補給やドリンクでの組織を挙げてのサポートが、19年ドーハ世界選手権と21年東京五輪でのメダルに結実した。

暑さ対策で先進の日本に追いつこうとする動きが各国で進んでいる。「コーチや選手が安心して試合に臨めるよう、継続してエビデンスを取って対策をしていくことが大事」と杉田。選手の能力同様、科学的サポートもまだ伸びしろがあると感じている。(谷六謙二)

今日も走ろう



鈴木 毅

この原稿が掲載される4月22日の夕刻にはウルトラトレイル・マウントファジ(Ultra Trail Mount Fuji)のスタートを切っているはずだ。自分にとって約3年ぶりとなる100マイルへの挑戦。

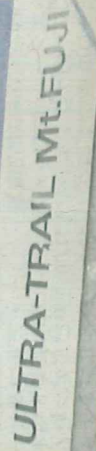
ぶりのレースへ

ガイド

スポーツ & 文化

■柏の葉キャンパスマラソンフェスタ 2022春 5月14日、千葉県立柏の葉公園総合競技場を発着点に開催。30知は制限時間4時間20分、参加費4700円。ハーフマラソンは制限時間3時間、参加費4300円。ともに参加資格18歳以上。小学生以上の2〜8人で走るフルリレー(42知)は制限時間5時間、参加費は2〜4人チームが1人3700円、5〜8人チームは同3300円。ほかに中学生以上が対象の個人の10知、小学生以上が参加できるハーフリレー(21知)、親子ペアマラソン(8知)などがある。主催は柏の葉キャンパスマラソンフェ

■TACT FESTIVAL 2022 5月1〜8日、池袋・東京芸術劇場ほか駅周辺各所。子どもから大人まで楽しめるパフォーマンスのイベント。ダンス公演やファミリー向けの落語、朗読音楽劇のほか、池袋の街中で無料で観覧できるショーなど音楽や演劇の垣根を越えた公演をそらえる。コスチュームアートのイストのひびのこづえが衣装を手がけた4つのダンス作品(1〜5日)で幕を開ける。東京芸術劇場ボックスオフイス@0570・010・296。 ■沖縄芸能フェスティバル2022 5月8日午後1時、午後6時、半蔵門・国立



目次の見出しに、

16年リオデジャネイロ五輪で荒井広宙(自衛隊、現富士通)が銅メダル、19年世界選手権で鈴木雄介(富士通)が金メダルを獲得するなど日本が好成績を収めてきた50キロに代わって、新たに主要種目になったのが35キロ。男子のトップ選手のタイムは、時間20分台と女

世界陸上競技連盟が21年限りで50キロ競歩を廃止したのも、そうした時流と無関係ではない。東京五輪男子で金メダルを取ったポルトガル選手の記録は3時間50分8秒。「競技時間が長いことや同じところを周回する特性から、五輪種目として見直しとなった状況は認識している」と日本陸連の競歩担当シニアディレクター、今村文男は話す。

2021年の東京五輪ではスケートボードやスポーツクライミング、サーフィンを初めて採用された。アクションと同じくスポーツの世界にもやはり変化があり、国際オリンピック委員会(IOC)は五輪の持続的な運営へ、若者の支持が高く競技の取り込みを重視する。

スポーツの 流儀

競歩大国 誕生の軌跡 ④

新種目「35キロ」地平切り開く



日本選手権男子35キロ競歩で優勝しガッツポーズする川野。50キロで培ったタミ子と20キロで磨いたスピードを生かした(4月)

所属の垣根越えた連帯力に

の記録を持っており、35キロでの成功にはやはり「20キロのスピードが必須(今村)ということになる。現状、選手が手探りで取り組んでいる35キロ強化のカギになるのは、密な情報共有かもしれない。競歩のトレーニングは1人より練習パートナーと歩く方がパフォーマンスの向上が見込める。ただチーム仲間が多い駅伝などの選手と違って、競技人口の少ない競歩は所属先の同僚に乏しい。そこで、他の大学や業団の選手を練習パートナーとして合宿に呼び合う習慣が定着。結果として日本の競



柳沢氏は日本競歩勢について「横のつながりがしっかりしている」と語る。提供

東京五輪50キロで6位入賞後、35キロに転向した川野将虎(旭化成)は当初はハイペースについていたが、すぐに自重。1キロ4分10秒前後と無理のないペースで着実にペースを進めた。一時は松永に1分半ほどの差をつけられたが、その松永が最終に失速する。残り約3キロでついに川野がかわすと、そのまま逃げ切り

優勝。派遣設定記録を大幅に上回る。この時点で今年世界最高の時間26分40秒で世界選手権代表に内定した川野は「国内最初の35キロの大会でタイトルが取れたのはすごくうれしい」と笑みを浮かべた。3月の世界競歩チーム選手権でも行われたものの、まだ開催実績が少なく、ペースをどう進めていくかの

「型がない(今村)35キロ。はたして20キロがメインの選手と50キロを主戦場にしてきた選手の間には、より力を発揮しやすいのが、富士通コーチの森岡紘一朗は前者の優位性を指摘する。気象条件やコースにもよるが、各種目の1キロあたり目標ペースは20キロがおおむね3分50秒、55秒、50キロは4分20秒、25秒で、35キロはその間の4分5秒、10秒。「1キロあたり10〜15秒ほどの余裕を考えると20キロの選手の方が序盤、中盤の余力はあるのかな」と森岡。日本選手権は20キロが本職の松永が高速ペースの影響もあり失速したが、世界競歩チーム選手権で表彰台上だったのは20キロが主の選手ばかり。日本選手権を制した川野は50キロをメインにしてきた一方、20キロで日本歴代3位(1時間17分24秒)

歩勢は「所属の垣根を越えて情報共有をすることへの抵抗感がない」と山梨学院大コーチの柳沢哲は話す。「どんな選手も必ずどこかで誰かの練習パートナーとして声をかけてもらったり、練習会を開いてもらったりしている。だから横のつながりがしっかりとある」と柳沢。競歩がマラソンや駅伝ほどスポーツライクを浴びてこなかったことも、ライバルでありながら絆を強める背景にあり、「いかに競歩という種目がメダルを取って関心を待ってもらい、強化につながっていくか」(柳沢)という思いも共有する。廃止になった50キロで日本が成功を取った要因について、今村は「20キロも並行して強化してきたことが50キロでの躍進のきっかけになったと分析している」。15年3月に鈴木が20キロで世界新記録を樹立すると、50キロは同年夏の世界選手権で谷井孝行(元自衛隊)、16年リオ五輪で荒井が銅メダル。19年世界選手権は20キロで山西和(愛知製鋼)、50キロで鈴木が優勝し、東京五輪は20キロで池田向希(旭化成)が銀、山西が銅を獲得。選手は互いの活躍に刺激を受け、高め合ってきた。35キロは50キロからの転向組だけでなく、20キロ勢からも松永のようにスピードに自信を持つ選手が多く進出していることが見込める。確かな技術や組織力で世界に存在感を示してきた競歩大国ニッポン。35キロの新たな地平も、強い連帯意識を方に切り開こうとしている。

敬称略 (谷合謙二) 上の項おわり

今日も走ろうぜ



鈴木 毅

サッカーのワールドカップ(W杯)アジア最終予選の最終戦、日本代表はベトナムと1-1で引き分けた。サッカーは全くの素人の自分が見ても、実力的には圧倒的に日本有利で攻め続けていたにもかかわらず、この結果だった。

ガイド

- Nagi Peaks Tough Trail Challenge 2022 6月5日、岡山県の津山市勝北総合スポーツ公園をゴールに開催。57知のチャレンジコース(累積標高4590米)は制限時間15時間30分、参加費1万4000円。32知のミドルコース(同2200米)は制限時間10時間、参加費1万円。ともに参加資格18歳以上。チャレンジコースはエントリー時点で25知以上のトレイルランレース完走経験者(この大会のミドルコース完走経験者を含む)が対象。主催は那岐ピークス大会事務局。
- ボテロ展 ふくよかな魔法 7月3日まで、渋谷・Bunkamuraザ・ミュージアム。様々なモチーフをふくらませたように描くコロロニア出身画家の、日本では26年ぶりとなる大規模個展。油彩や水彩、素描など様々な手法で人物や動物、果物だけでなく楽器や日用品まで膨張させて描くことで、官能や皮肉を表現する。初期から世界初公開となる「モナ・リザの横顔」など近年の作品まで、作家本人の監修による約70点が並ぶ。17日休。一般1800円。ハローダイヤル050・5541・8600。

スポーツ & 文化

負は油断大敵